⑵　学級生活のアンケート結果から

本年度の実践終了時に，研究協力学級で事前調査と同じアンケートを行った。

抽出児童生徒４名の学級生活のアンケートの事前，事後の調査結果を比較したものが，(資料15) である。

（資料15）学級生活のアンケート結果

A子

	①考え	②気配	③充実	④承認	⑤楽し	⑥依存	⑦目標	⑧所属	⑨役割	⑩違い	⑪違生
事前	2	3	3	3	4	2	3	2	2	3	3
事後	3	3	4	3	4	3	4	4	3	3	4

B男

	①考え	②気配	③充実	④承認	⑤楽し	⑥依存	⑦目標	⑧所属	⑨役割	⑩違い	⑪違生
事前	2	3	2	2	3	2	2	3	2	2	2
事後	2	3	3	3	3	2	4	4	2	3	3

C男

	①考え	②気配	③充実	④承認	⑤楽し	⑥依存	⑦目標	⑧所属	⑨役割	⑩違い	⑪違生
事前	2	2	3	2	3	2	1	3	2	2	2
事後	3	2	3	3	3	3	1	4	2	2	4

D男

	①考え	②気配	③充実	④承認	⑤楽し	⑥依存	⑦目標	⑧所属	⑨役割	⑩違い	⑪違生
事前	3	2	3	2	4	2	2	2	2	2	3
事後	3	3	3	2	4	2	2	3	2	3	3

特に顕著な変容が見られたのは，⑧学級への所属感の項目で，４名とも評価が高くなっている。

これは，構成的グループ・エンカウンターを中心とした指導援助により自己理解や他者理解が深まり，学級集団に対する関心・思い入れが強くなってきたためと考えられる。このことからも，それぞれの学級において，好ましい人間関係が築かれてきている様子がうかがえる。

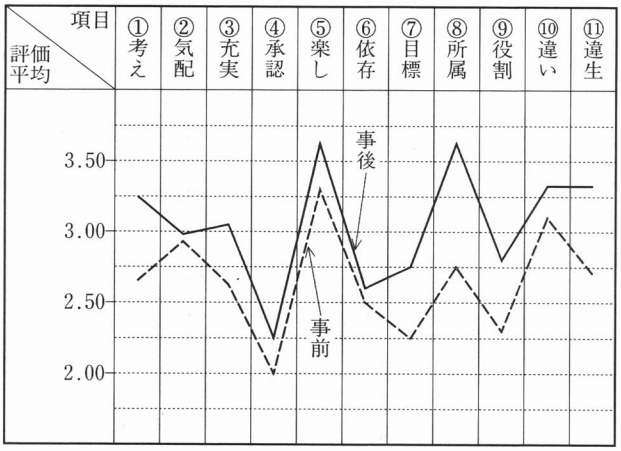
2　学級全体の変容

⑴　事後調査の結果から

学級生活のアンケート結果を，各項目ごとに学級平均を算出し，事前と事後を比較して学級全体の変容をとらえることとした。(資料16) は，中学校N学級のアンケートの結果を，グラフ化したものである。

（資料16）学級生活のアンケート結果

《各項目ごとの学級全体の平均》



ほとんどの項目でプラスの変容が見られ，特に，①，③，⑦，⑧，⑨の項目での変容が他より大きかった。この中の⑧と⑨は今年度の研究でねらった項目であり，自己理解や他者理解の深まりが，学級への所属感と学級への関心を高めたものと思われる。

なお，他の校種・学級でも，ほとんど同じような傾向がみられた。

⑵　担任の観察から

第１年次の実践後，各校種の担任の観察でも，以下のような変容が認められた。

小学校３年

- ○　昼休みに男女が一緒に遊ぶようになった。
- ○　明るくなった。
- ○　素直な表現ができる子どもが増えた。
- ○　のびのびしてきた。
- ○　友達を意識するようになった。
- ○　けんかが少なくなった。
- ○　学級がまとまってきた。